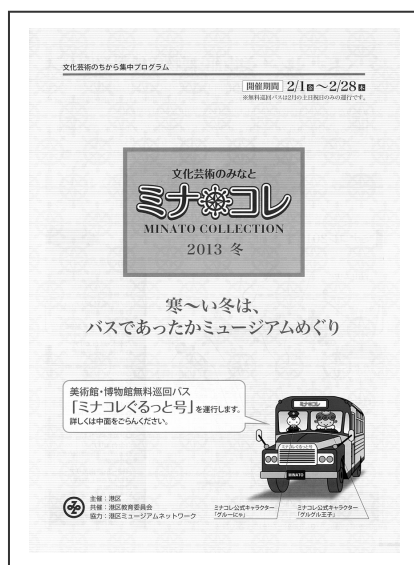


資料館だより

第 71 号
2013.3.1

目 次

館蔵幕末・明治期古写真集を刊行します	2	墓誌から見る大名家奥方の履歴	
新収蔵資料「巖谷小波あて尾崎紅葉書簡」より	3	一島津家大円寺墓誌より	6
芝公園にあったモニュメント	4	コーナー展 三陸海岸の縄文文化	
港区名所案内 月の岬・伊皿子坂（潮見坂）	5	一暮らしを支えた技・海・祈	7



(ミナコレ 2013 冬 パンフレットより)

文化芸術のみなと 『ミナコレ 2013 冬』が開催されました

港区では、平成 24 年度から「文化芸術のちから集中プログラム」として 8 月と 2 月に「文化芸術のみなと ミナコレ(MINATO COLLECTION)」を開催しました。この事業は、港区役所産業・地域振興支援部地域振興課が主催するもので、港区ミュージアムネットワーク加盟館の協力を得て実施しています。当館も加盟館の一員として参加しました。

今年度は 8 月には加盟館の「スタンプラリー」を実施しましたが、2 月の一ヶ月間は加盟館を巡る無料巡回バス「ミナコレぐるっと号」が、期間中の土・日・祝日、午前 10 時から午後 7 時までの間に 30 分間隔で運行されました。バスは

区内 7 ヶ所に置かれた臨時バス停を左回りにおよそ 1 時間をかけて巡回し、どのバス停でも乗り降り自由として、美術館や博物館の展示鑑賞やイベントに参加するだけではなく、付近の観光スポットや商業施設にも立ち寄って、港区を丸ごと楽しめる企画になりました。

当館では「コーナー展 三陸海岸の縄文文化ー慶應義塾大学所蔵資料展」を開催中で、東日本大震災被災地の縄文文化が持っていた高い技術と豊かな想像力にふれていただきました。

「ミナコレ」は来年度以降も同時期に開催されます。当館も積極的に参加し、「文化芸術のみなと」の発信に協力していきます。

館蔵幕末・明治期古写真集

を刊行します

松本 健

(学芸員)

19世紀前半に発明された写真は、当初露光時間が8時間以上も必要でしたが、19世紀の半ばには「湿板写真」の開発により露光時間が5～15秒ほどとなり、焼き増しができるようになったことで写真は急速に広まりました。この時期は日本ではちょうど鎖国が終わった時代にあたり、来日した多くの外国人にとって珍しい極東の島国の風景や人々の姿は写真としてそれぞれの国々に紹介され、多くの写真が残されました。

当館では、幕末・維新期の著名人を数多く含む「井関盛良コレクション」などの人物写真ははじめとして幕末・明治期の日本各地の風景や風俗を記録した古写真を収集・保存しています。

「井関盛良コレクション」については、すでに写真集を刊行していますが、今回は風景写真を中心とした幕末から明治時代に撮影されたと考えられる写真169点を収めた写真集の刊行に向けて準備を進めています。

これらの古写真は長い時を経てすっかり変わってしまった日本の風景や災害・戦災で失われた文化財、そして当時の人々の姿などを伝える貴重な記録であり、歴史資料でもあります。そのため、本写真集では、単に古写真を掲載するだけではなく、歴史の一瞬を記録した資料として位置付けるために、写真の中に記録されている撮影時期や場所などを知るための手がかりを探り、その結果をできる限り紹介することとしました。

例えば、右の増上寺三門の写真は、当初撮影時期が不明でしたが、よく観察すると門の奥に見えるはずの本堂がな

く、本来三門からは見ることはできない本堂裏手にあった黒本尊堂が写り、門には「増上寺再建作業所」の看板と門前の石段には土で資材搬入用のスロープが作られているのが確認できました。増上寺の本堂は、明治5年(1872)12月31日に放火により焼失し、その再建工事は7年後に開始されています。この写真は、ちょうど再建工事が開始された明治12年に撮影されたものであることがわかりました。写真画面では幅1mm、長さ1cmに満たない小さな看板が、写真の撮影年代を知るための大きな情報となったのです。写真集では、解説とともにこの看板部分の拡大写真も掲載する予定です。

また、東京都写真美術館学芸員三井圭司氏には写真史から見た館蔵古写真コレクションについて、さらに東京家政大学博物館学芸員藤井裕子氏には写されている人物の服装に視点を向けた論考をそれぞれご執筆いただきます。

これまでの一般的な古写真集にはない側面からの分析と成果を掲載した館蔵古写真集になります。ご期待ください。



新収蔵資料「^{いわ や さざなみ}巖谷小波あて尾崎紅葉書簡」より

小澤 絵理子
(文化財保護調査員)

港郷土資料館では、平成 24 年度、尾崎紅葉(1868-1903)が巖谷小波(1870-1933)にあてた書簡 3 通を新たに収蔵しました。いずれの書簡も、二人の親交の深さをうかがえる内容です。

尾崎紅葉は、誕生から 19 歳までを港区内で過ごしています。日本で最初の文学結社・硯友社^{けんゆう}を結成して明治期の文学を牽引^{けんいん}し、売れっ子作家として一世を風靡^{ふうび}しましたが、病のために 35 年 9 か月という若さでこの世を去りました。

児童文学の先駆者として知られる巖谷小波は、明治 21 年(1888)に紅葉と会い、硯友社に入って本格的に文学活動を始めます。なお、小波は明治 40 年から昭和 8 年(1933)に 63 歳で逝去するまで、区内高輪に居住しており、彼もまた港区に縁の深い文学者です。

新収蔵書簡のうちの 2 通は、明治 34 年(1901)にベルリン滞在中の小波にあてたものです。自身の近況や硯友社同人たちの様子をユーモアも交えて伝える内容で、二人の親しさを裏付ける心のこもった長文の手紙です。9 月 3 日付、同年 10 月 4 日付のこの 2 通はいずれも『紅葉全集』第 12 巻(岩波書店)に収蔵されています。

もう 1 通〔写真〕は、『紅葉全集』には収められていない手紙です。日付を欠きますが、記載内容から明治 24 年(1891) 1 月 29 日のものだと考えられます。以下、その内容を簡単にご紹介します。

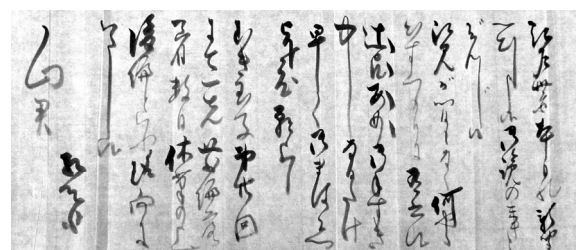
【書簡本文】(／は改行箇所。下線と太字は小澤)

江戸紫 本日の新聞／へ出し申候御覧の事と
／ぞんじ候／江見が間もなく何やら／出すつ
／もりに有之候／辻占あめ御手すき／中なるだけ
／早く御まはし／被成度願上候／むき玉子第
廿回／にて一先前編落／着 数日休筆の上／後
編といふ趣向に／いたし候／紅葉／□君

書簡冒頭の〈江戸紫〉とは、硯友社が明治 23 年 6 月から同年 12 月までに 10 号を発行した文芸雑誌です。明治 24 年 1 月 29 日「読売新聞」1 面に「主筆尾崎紅葉氏筆耕多端に付同志を廃刊し読売新聞紙上に江戸紫の一欄を設け候間此段広告す」とあり、この前後の日の紙面には「江戸紫」に関する記事がないため、〈本日〉が 1 月 29 日であることがわかります。2 月 1 日の紙面から早速「江戸紫」欄が始まり、硯友社の同人の江見水蔭^{えみすいゐん}が、同年 2 月 5 日から 9 日まで「諸国雑話～高野の巻～」という小説を掲載しています。書簡中の〈江見が間もなく何やら出す〉とは、このことだと考えられます。

〈むき玉子〉は、「読売新聞」に連載した紅葉の小説です。前編を終えるにあたり、2 月 3 日の回の末尾に「むき玉子下編ハ恋、義理、人情の紛擾〈もつれ〉ありて話説〈はなし〉いよいよ佳境に入る。来る十日より続々掲載可致候 筆者」と予告を記しており、書簡中の〈数日休筆の上〉に一致します。なお、同 2 月 12 日の第 3 面には「○お断り 尾崎紅葉インフリュエンザに罹り引続き脳病にて執筆なりがたければ下編ハなほ数日中快気に趣き次第掲載すべし」という記事が掲載され、実際の後編開始は 2 月 26 日からになりました。

明治 24 年は、読売新聞の連載で注目を集め、紅葉が人気作家として躍進していく時期にあたります。短信ですが、多忙ながらも充実した日々の様子が垣間見られる貴重な 1 通です。



芝公園にあったモニュメント

大坪 潤子
(文化財保護調査員)

戦前、芝公園に銅像や記念碑などのモニュメントが点在していたことをご存知でしょうか。

区立みなと図書館の隣、現在こども平和塔があるあたりには、大正2年(1913)から10年間、総高約15.5mの「佐渡丸遭難記念碑」が建っていました。佐渡丸とは日露戦争時の陸軍運送船で、明治37年(1904)6月、ロシア海軍の砲撃により沈没しました。この際、主な乗客であった鉄道関係者に多くの犠牲者が出たことから、当時の鉄道庁総裁を委員長として記念碑の計画がおこったのです。除幕直前の新聞には「芝御成門の鉄道院被服工場構内、公園の松の翠に囲まれた二百三十余坪の空地には近來外壁が取り除かれて見事な銅像が建てられた」(大正2年6月4日付『読売新聞』)とあります。記念碑は円柱状で、碑頭に橘姫の銅像を載せていました。橘姫は、『古事記』などに登場するヤマトタケルの妃・オトタチバナヒメを表していると考えられます。オトタチバナヒメが海に身を投じて海神を鎮めたことから、佐渡丸遭難の犠牲者を追悼するシンボルとして選ばれたものでしょう。像の原型は、他に海軍大将の像などを手がけた田中雄一が制作しました。この記念碑は、大正12年(1923)の関東大震災で崩壊してしまい、のちに違う形をした二代目が作られますが、太平洋戦争後に撤去されています。

近年、日本交通協会(千代田区)が初代記念

碑の縮小模型〔写真〕をご所蔵であることが判りました(同会の図書室で見ることが出来ます)。鮮明な写真が残っていなかった記念碑全体のプロポーシオンを、この模型からうかがえます。

この他のモニュメントを概観してみましょう。

芝公園は、明治6年(1873)に増上寺境内が「公園」として定められて整備が始まりました。そして明治22年(1889)にオベリスク状の「伊能忠敬先生測地遺功表」(高さ約8.6m、青銅製、戦時供出。現在のものは戦後の別作)が丸山古墳の上に建ったほか、政治家らの銅像も園内に建設されています〔表〕。公園とモニュメントとは、共に近代化の一端として現れたものでした。

しかしこれらの銅像は、長岡外史の胸像(戦後増上寺で保管後、新潟県に移設)以外は全て戦時中の金属回収で失われ、『芝区誌』や絵葉書、新聞などにのみその姿を留めています。

かつての芝公園は、増上寺の伽藍や緑の間に近代的なモニュメントが見え隠れする空間だったのかも知れません。



佐渡丸遭難記念碑模型

像主名	像主職種等	除幕または竣工年	建設主唱者	原型制作者	位置
小菅知淵	陸軍陸地測量部長	明治32年6月竣工	榎本武揚他	藤田文蔵	旧台徳院霊廟惣門近く
後藤象二郎	政治家	明治37年7月15日	板垣退助他	本山白雲	山門を出て左の角向かい
板垣退助	政治家	大正2年4月19日	松田正久他	本山白雲	丸山稲荷近く
大隈重信	政治家、教育者	大正5年11月5日	北畠治房	朝倉文夫	都立芝公園グラウンド内
長岡外史	陸軍中将、帝国飛行協会副会長	昭和9年4月21日	古川阪次郎	不明	増上寺山門と本堂の間右側→現在、新潟県上越市

いさらご 月の岬・伊皿子坂（潮見坂）

平田 秀勝
(文化財保護調査員)

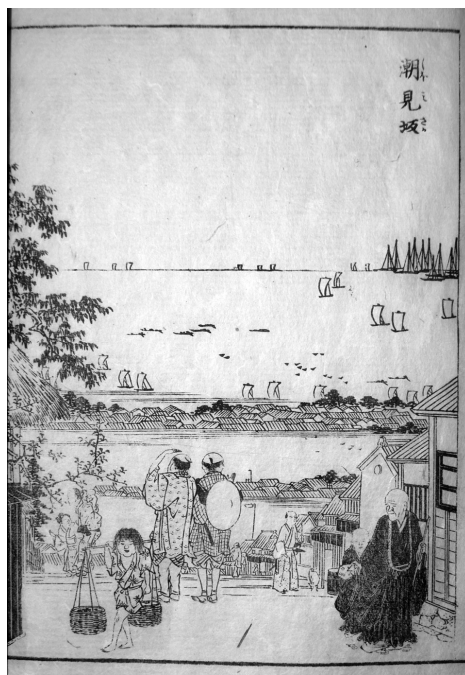
港区は、秩父山麓よりひろがる武蔵野台地の末端、通称「山の手台地」と谷地、東京湾に面する低地とが入り組む、起伏に富んだ地形をしています。区内には、赤坂台、麻布台、白金台などそれぞれの地域に台地が存在していますが、現在の三田四丁目一帯を占め、南側の高輪台に連なる三田台は、江戸の昔より著名な名所・景勝地でした。

三田台は別名「月の岬」と称されています。江戸時代、現在の第一京浜（国道15号）間際まで海岸線が迫っていたため、三田台の東側崖下には品川沖の海が広がっていました。その海上に浮かぶ月の眺望は絶景であったと伝えられ、『遊歴雑記』には、「月の岬」の由来として、慶長年間（1596-1615）、徳川家康がここから海上に浮かぶ月の美しさを褒め、名づけたとあります。この説の真偽は別として、その名の通り観月の名所として広く知られており、『東都紀行』には「月の岬」を歌枕に

秋ならば つきのみさきや いかならむ
名は夏山の しげみのみして
と和歌に詠まれています。

三田台を南に進み、三田四丁目と高輪一、二丁目の間の交差点より泉岳寺方面に向かって下る坂は伊皿子坂です。伊皿子という他所に例を見ないユニークな地名の由来には、①『更級日記』にある「いさらふ」がなまり「いさらご」となった②鎌倉幕府執権北条氏の一族・大仏陸奥守貞直が住んでおり「おさらぎ」から変化した③江戸時代初期に伊皿子という明人が住んでいたため地名となったなど諸説あります。泉岳寺方面へ下る道筋は、明治後期以降に行われた拡張工事によるもので、坂の中腹より三田四丁目19番と高輪二丁目16番の間を第一京浜に向かって下る細道が本来の伊皿子坂のルートで

す。伊皿子坂の上からは品川沖の海を一望できたことから、別名「潮見坂（汐見坂）」と呼ばれていました。明治から昭和にかけて活躍した小説家・永井荷風は、随筆『日和下駄』で「芝伊皿子台上の汐見坂も、天然の地形と距離との宜しきが為に品川の御台場依然として昔の名所絵に見る通り道行く人の鼻先に浮べる有様、之に因つて此を観れば古来江戸名所に数へらるゝ地点ことごと悉く名ばかりの名所でない事を証するに足りる」と眺望のすばらしさを記しています。



潮見坂〔伊皿子坂〕（『江戸名所図会』より）

三田台の別名にして古くからの観月の名所「月の岬」は明治以降、建物に視界を阻まれてその眺望を失いました。潮見の名所「伊皿子坂」も大正年間より進められた芝浦の埋立てにより、海を臨むことは出来なくなりました。名所としての眺めは失いましたが、地形や道筋は大きく変わることなく、わずかながら江戸の面影を今に伝えています。

墓誌から見る大名家奥方の履歴

— 島津家大円寺墓誌より —

竹村 到

(文化財保護調査員)

平成24年10月27日(土)から12月16日(日)まで開催した特別展「江戸の大名菩提寺」では、江戸時代、港区域に存在した大名菩提寺を、「葬る」「詣でる」「納める」の3つの視点から紹介しました。会期中は、2900名を越える来館者に恵まれ、好評のうちに幕を閉じました。

本稿では、特別展の中で十分に紹介することができなかった「島津家大円寺墓誌」(拓本、東京大学史料編纂所蔵島津家文書)について、もう少し詳しく見ていきたいと思います。

特別展では、島津家墓誌の拓本のうち3点ほど紹介しました(特別展示図録『江戸の大名菩提寺』25頁参照)。実は、これらの拓本には、葬られた人物の略伝を刻んだ、もう一つの墓誌拓本が存在しています。もともと島津家の墓誌が2枚あったのか、特別展で紹介した墓誌の裏面に刻まれていたのかは、現在のところ不明です。

通常、大名家の奥方・子女などの履歴は、家に伝えられた系図や記録、菩提寺に残された過去帳などの諸記録からうかがうことができます。

しかし、幼くして亡くなった子女などは、これらの情報が少なく、場合によっては名前すら諸記録から抹消されていることもあります。

とりわけ奥方の場合は、情報が簡易であることが多く、嫁いだ先の家の系図などから十分な情報を得ることは困難なことが多いのです。

このような状況を踏まえると、墓誌に刻まれた略伝は、大名家の奥方・子女の履歴を知ることができる貴重な資料といえます。

では、彌姫(賢章院、島津齊興正室、島津齊彬実母)の墓誌を題材に、どのような記述がなされているかを見ていきましょう。

夫人、姓は源、松平氏彌姫と称す。松平治道の女にして、寛政三年十二月廿八日を以て生る。母は、松平陸奥守重村の女なる。長

して、薩・隅・日三州の太守豊後守源齊興に嫁し、三男一女を産めり。長ハ又三郎忠方、即ち今の世子なり。次は治五郎と称す。次は女子祝と名つく。次ハ猪之助、先つて夭す。夫人、天資聡明にて克く女訓に習ひ、書を読ミ、和歌を能くし、文苑の技、頗る其道に達す。旁ら好んで佛理を修す。凶らさるに病かゝつて、文政七年八月十六日江都之芝邸にして粧を掩ふ、年を享ること三十余四、法号賢章院殿玉輪恵光大姉、嗚呼夫人の福德、天何か寿を奪ふ、命とふへくをて、同廿一日同郷大圓寺先榮ノ次てに葬る。因て謹て誌す。

この墓誌の記述は、大きく分けて以下の4つの情報から構成されていることがわかります。

- ① 姓氏・出生に関するもの
- ② 嫁ぎ先と産んだ子女に関するもの
- ③ 性格や嗜好などに関するもの
- ④ 没年や法号、墓所などに関するもの

そもそも墓誌は、古代中国にその源流があり、書式も定められていました。そこでは、表題・姓氏・諱・字・出身地・世系・行跡・官歴・卒年・卒地・追贈官位・諡号・年齢・葬年・葬地が記されることになっていました。

彌姫の墓誌と比較してみると、表題こそないものの、古代中国で定められた書式とほぼ同様の内容が記されていることがわかります。

このように、墓誌の記述からは正確に大名家の奥方の履歴を知ることができます。特に、自身が産んだ子女の情報があり、親子関係がわかることは、非常に重要です。

【参考文献】大脇潔「墓誌」(『日本歴史考古学を学ぶ』中、有斐閣、1986年2月)、石田肇「江戸時代の墓誌」(『群馬大学教育学部紀要(人文・社会科学編)』56、2007年2月)、谷川章雄「江戸の墓誌の変遷」(『国立歴史民俗博物館研究報告』169、2011年11月)

三陸海岸の縄文文化

—暮らしを支えた技・海・祈—

安藤 広道

(慶應義塾大学教授)

この展示は、昨年から始まった慶應義塾大学民族学考古学専攻の学生たちによる、大学所蔵資料展の第二弾です。今回は、昨年の展示が好評だったため(?)、期間を伸ばして、平成 25 年 1 月 5 日～2 月 20 日の開催となりました。

今年のテーマは三陸海岸の縄文文化です。なぜ三陸?と思われる方もいらっしゃるでしょうが、そこには東日本大震災が関係しています。

大震災で甚大な被害を受けた三陸海岸は、実は縄文文化の遺跡が多いことでも知られています。被災地の復興事業のニュースは日々耳にしていると思いますが、今、そうした事業とともに、被災した遺物の整理や住宅地の高所移転に伴う遺跡の発掘といった文化財保護の取り組みが行われていることをご存じでしょうか。三陸海岸を取り上げたのは、こうした文化財の保護事業を応援したいという気持ちからでした。

我々の研究室は、戦後間もないころから、数多くの三陸海岸の遺跡を発掘してきました。そこには国史跡の^{おおほら}大洞貝塚をはじめ、著名な遺跡も含まれ、出土遺物には学術的・美術的に高く評価されているものも少なくありません。また、遺跡や遺物を対象に行われた研究は、その都度、研究者たちの注目を集めてきました。

文化財の保護には多くの方々の理解と協力が必要です。そこで、大学にあったために被災を免れた資料を通じて、皆さんに三陸海岸の重要な遺跡の存在を知っていただき、あわせて被災地における文化財の保護と活用の意味を考えるきっかけにしてもらえれば、と思ったわけです。

さて、今回展示した資料の多くは、縄文時代の終わりころのものです。この時期の東北地方の遺物は、高い技術と豊かな造形力を持つことで知られ、呪術に用いられたとされる不思議な道具類の発達も特徴です。また、道具類の素材、

デザイン、製作技術などが、東北全体に広がっていたことも明らかになっています。三陸海岸では、漁労具の発達も顕著で、海への働きかけが特に強まっていたことがうかがわれます。

ただ、縄文時代の終わりころは、今より気温が低く、人口が減少した時期にあたります。そうした厳しい環境のなかで、人々は技術と造形力を磨き、自然に挑み、人や地域同士の交流を大切にしながら、たくましく生きていたのです。

展示では、三陸海岸の縄文文化の特徴を、「技」「海」「祈」の三つの切り口で見えていただくとともに、それぞれに人や地域のつながりがみられることを示すようにしました。また、遺物ひとつひとつの特徴と魅力を感じとっていただくため、学生たちが、資料の配置、パネル、解説文に、精一杯の工夫をこらしました。

準備を進めるなかで我々は、三陸海岸の縄文文化が、困難を人間の社会がどのように乗り越えていくかを私たちに見せてくれているのではないかと感じ始めました。また、個々の遺物は、厳しい環境のなかで心血を注いで生み出した技や造形が、後世の人々にまで驚きや感動を与える力を持つことを教えてくれているようです。文化財を保護する意味は、こうしたことを実感できるところにもあるのだと思います。



完成した展示と参加した学生たち

事業予定 (平成 25 年 3 月～)

コーナー展

・「館蔵武家文書」 3 月 22 日～6 月 15 日

当館が所蔵する江戸時代の武家に関する古文書を紹介します。前期は、旗本・御家人に関する資料を、後期は各藩士に関する資料を、それぞれ紹介する予定です。

講座など

・親子学習会 「日本庭園にふれてミニミニ石庭 (枯山水)を作ってみよう!」 3月9・23日

昨年度も開催し好評だった、日本庭園がテーマの学習会です。旧芝離宮庭園の見学と枯山水の箱庭作りをおこないます。(申込締切: 3月2日)

- ・上記の事業以外にも、さまざまな事業を予定しています。事業の詳細は『広報みなど』や郷土資料館ホームページをご覧ください。

刊行物案内

『江戸の大名菩提寺』〈特別展展示図録〉

平成 24 年度特別展「江戸の大名菩提寺」の展示図録です。三本の関連論考も収められています。
(頒布価格 1000 円)

【平成 25 年 3 月以降刊行予定】

『研究紀要 15』

伊皿子貝塚遺跡の動物遺体の調査分析や、区内にあった建築の調査報告、泉岳寺が所有する曼陀羅に関する論考などを収録します。
(頒布予定価格 800 円)

『館蔵幕末・明治期古写真集』

当館が所蔵する古写真 169 点を収めた写真集です。画像から多角的に情報を読み取っていきます(本誌 2 頁をご参照下さい)。
(頒布予定価格 1500 円)

- ・このほか、『増補港区近代沿革図集』『写された港区』など、各種刊行物があります。郷土資料館ホームページに一覧を掲載し、販売は展示室横の事務室、または郵送にておこなっています。

事業報告 (平成 24 年 10 月～平成 25 年 2 月)

- ①コーナー展「グラフ誌にみる昭和 30 年代 - 館蔵資料より -」
7 月 2 日～10 月 13 日
- ②資料館講座「江戸の大名菩提寺」(全 3 回) 11 月 2・9・16 日
- ③土曜体験教室「古代のアクセサリを作ろう!」
12 月 8 日・平成 25 年 2 月 16 日
- ④コーナー展「三陸海岸の縄文文化」
平成 25 年 1 月 5 日～2 月 20 日
- ⑤古文書講座(全 5 回)
平成 25 年 2 月 1・8・15・22 日(・3 月 1 日)

特別展「江戸の大名菩提寺」 を開催しました。

昨秋 10 月 27 日(土)から 12 月 16 日(日)まで、平成 24 年度特別展「江戸の大名菩提寺」を開催しました。本展示では、大名菩提寺を「葬る」「詣でる」「納める」の 3 つの視点から紹介しました。

中でも、牧野家墓所の副葬品や島津家が納めた経典、イヌ・ネコの墓石などに高い関心が寄せられました。関連講座にも多くの方にお出でいただきました。

港区立港郷土資料館の利用案内

交通 JR「田町」駅下車徒歩 5 分、都営地下鉄「三田」駅下車(A3 出口)徒歩 2 分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩 2 分、港区コミュニティバス(ちいばす)
「田町駅前」停留所下車徒歩 2 分、「田町駅西口」停留所下車徒歩 3 分

開館時間 9:00～17:00

休館日 日曜日・祝日・第 3 木曜日
年末年始・特別整理期間
(臨時休館などは HP などで随時お知らせします)

入館料 無料



『資料館だより』第 71 号
平成 25 年(2013)3 月 1 日発行
編集・発行 港区立港郷土資料館
〒108-0014
東京都港区芝 5-28-4
Tel. 03-3452-4966
Fax. 03-5476-6369
<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>
刊行物発行番号 24070-7541